WOC２００５誘致への道　　第二話

WOC2005 準備委員会　事務局長　落合公也

●福田会長への相談

博覧会国際事務局総会（97 年 6 月）で 2005 年愛知万博が決まってから, 2005 年世界選手権へ向けて実際に動き出すまでには時間がかかった。いわむら大会の作図を抱えていたこと, 98 年 3 月の全日本大会の準備が県協会内部で始まったこと，などが重なった。

そうしているうち，秋にきっかけはおとずれた。愛知県協会会長の福田清彦さんが全日本大会のことで話があるとたずねてきてくれた。そのときにこちらからもお願いがあると世界選手権の構想を切り出した。福田さんは即座に理解をしてくれて，県協会内部でオーソライズされたものではないが会長特命委員会の設置が決まった。メンバーは県内の若手でということで，つるまい OLC から新帯，松久，佐藤，三河 OLC から稲葉，ルーパーからは落合，県外から村越ということでスタートした。ことがことだけに水面下での検討が始まった。また同時にＪＯＡにも意思を伝えた。

のちに特命委員会は通称を「ドリーム 2005 プロジェクト」とし，全国から新たなメンバーの協力を得ていくことになった。

●意思表明のためＩＯＦ総会へ

これまでに世界選手権開催を立候補しようとする国は，開催の７年前のＩＯＦ総会で立候補の意思表明をおこなっている。前例を踏襲すれば 2005 年の 7 年前, つまり 1998 年の総会に出向いて意思表明をしなければならない。ぼくが愛知を代表して出席することになり，村越さんはＪＯＡの代表として出席することとなった。

立候補表明をするというのに国内での公表をしないわけにはいかない。98 年の夏を感じるころ, 愛知県協会加盟の各クラブに対して公表した。

IOF 総会での日本の意思表明に対して各国の反応は非常に良好であった。アジア初であること，「自然との共生」をうたう愛知万博と同時開催であること，はＩＯＦの方針，理念に一致するところである。それまで数年間の開催国決定では実際のところ誘致合戦はなく，すんなりと決まっていた。今回は日本のほかに意思表明をした国はなく，日本が正式な立候補をすれば，同様にすんなりと決まるかに思えた。

●愛知県協会事務局問題

ＩＯＦ総会で意思表明をしたものの，国内的には正式な体制にはいたっていなかった。一番の大きな問題は愛知県協会の事務局の体制であった。愛知県協会の事務局は愛知県教育委員会の外郭団体に置かれていた。その団体の職員が県協会事務局員としての雑務をおこなっており，通常の県協会運営には大変に助かっていた。また全日本大会のようなことがあっても，行政組織の強みを生かした地元への渉外活動はありがたいものだった。

しかしながら行政らしく，世界選手権という見たことのないもの，お金のかかることをやりたいといわれると腰が抜けてしまう。それも仕方のないことである。愛知県行政の財政状況は危機的な状態であり，外郭団体においても職員の減員や経費の節約を口うるさく言われているところであった。オリエンテーリング以外にもいくつかの団体の事務局を抱えているのだが，いずれも手放したい状況だった。

当県協会も 2000 年から数年かけて段階的に独立するつもりであった。それでは世界選手権の開催申請にあたっても行政の意向を無視するわけにはいかない。無視できないということは立候補できないことを意味する。事務局を預かる行政組織として，現在の財政状況でうんといえたものではないのであった。

うんとはいえないもののこちらの思いを受け止めてくれた。オリエンティア自身の世界選手権への思いを酌んでくれて，一気に独立する道を整備してくれたのだ。1999 年の年末までには 2000 年度から独立することが決まった。それにより開催申請への道が開けた。

●ＪＯＡの始動

水面下での検討が始まって以来，ＪＯＡに対しては折々の状況報告がなされていた。ところが積極的に関与してくれるようになったのは，1999 年 10 月のＰＷＴ東京大会のときに，ＪＯＡ副会長の伊藤牧夫さんに直談判をして以降である。男子の競技中に会場脇の植樹帯の縁石に座っていた伊藤さんを捕まえて，１時間余りにわたって話し込んだのだ。明らかにこの日を境にＪＯＡの姿勢が変わった。

とはいうもののＪＯＡも財政問題についてことごとく心配した。赤字になっても愛知県が責任を負うという念書，愛知県協会加盟クラブの総意にもとづく会長名の文書をもって，最終的な開催申請書の同意に至った。

●そして開催申請へ

開催申請書の作成にあたってはスイス連盟の協力を得た。スイスは 2003 年世界選手権の開催国であり，ちょうど 2 年前に開催申請書を作成していた。そのときの申請書の写しをもらうことができて，それをまっ

たく模倣した。

出来上がった申請書は EMS でフィンランドのＩＯＦ事務局へ送った。EMS のいいところは郵便物がどこにあるか追跡ができることだ。発送がぎりぎりになったので，申請書の現在位置がきになって仕方がなく，追跡状況をモニターしていた。2000 年 1 月 31 日の締め切りに 1 日遅かったようだが，モニターしていたおかげでその状況を IOF 事務局に伝えることができて，問題なく受理された，

●応援してくれる社会

開催申請をしてから応援団が増えていった。オリエンテーリングは日本国内において間違いなくマイナーなスポーツである。しかしながら条件がそろえば立場が変わるということである。

◎2005 年日本国際博覧会協会

誘致活動への後援，ＩＯＦ総会への職員派遣，資材の提供などご協力をいただいた。広報リーフレットでの世界選手権の紹介をいただき，また博覧会国際事務局に提出した博覧会登録申請書の中には世界選手権の記述を入れていただいた。この登録申請書は閣議決定されて提出された外交文書であり，そのなかに書かれたというのはいかに名誉なことかおわかりいただけるであろう。

◎国際観光振興会

インカレの宿泊，選手輸送などでお世話になっている日本旅行にご紹介いただいた運輸省の外郭団体で、日本への外国人旅行者を誘致することが目的の組織である。普通は国際会議の誘致活動のお手伝いをしていて，スポーツイベントは例がなかったそうだが，きめ細かなアドバイスをいただいた。

◎日本航空

国際会議のときの協賛では航空運賃と宿泊費をセットにしたお得なプランを提供している。世界選手権のときにも同様な料金での航空運賃の提供をいただけることになっている。

◎アルプス社

名古屋に本社のある地図会社であり、ロードマップの「アトラスＲＤ」が有名である。オリエンティアの社員が何人かいて，なにより地図屋であるということで，誘致活動で使った資料の印刷代はだしていただいた。

◎中部日本スウェーデン協会

ぼくが個人的に会員となっているスウェーデンとの国際交流団体。今回のライバルがスウェーデンということであったが，協会の会報でオリエンテーリングや世界選手権の紹介をさせていただいた。

◎ＣＢＣ

誘致活動をニュース番組のなかの特集で取り上げてくれた。開催が決まった翌日には 2 回にわたって誘致決定をニュース番組でを報道してくれた。

◎毎日新聞

誘致決定の記事を翌日の地元版で掲載してくれた。4 月のワールドカップ静岡大会のときの大きな記事が誘致活動でのプレゼンに役立った。

◎地元市町村

開催場所となる直接の地元町村においても，地域活性化などの狙いから大変に好意的，積極的に受け止められている。2001 年早々には地元町村での準備委員会が設置される予定である。

●開催決定，そしてこれから

２年に渡る誘致活動が実ったその日は 2000 年 8 月 4 日だった。その日に日本は大きな喜びと責任を背負うことになった。スウェーデン，ハンガリーに勝った意味はとても大きい。そして世界の期待も大きい。アジア初の世界選手権として，世界的な普及の象徴となるだろう。その期待に応えていきたい。

国内においてもオリエンテーリングが再び日の目を浴びるチャンスとなる。すでにオリエンティアではない多くの人が世界選手権への関心を寄せている。目的はいろいろあろうが，昭和 50 年ころに日本中で盛んにおこなわれていたころの再現となるポテンシャルが世界選手権にはあるのだ。このことはつまり国内における普及を意味する。全国において今一度，普及活動に力を入れてみるきっかけにしなければならない。

ここで普及がなされれば，競技環境の改善につながるのだ。職場や学校でオリエンテーリングをやっているといえば，最近のトライアスロンのごとく「すごーい」といわれるようになるかもしれない。大会においてはスポンサーの獲得だって容易になるだろう。大会開催の地元渉外でも，理解がすすむだろう。

2005 年世界選手権のさらに未来には，オリエンティアが抱いている潜在的な願望がまっているのだ。

2000 年 12 月にＪＯＡ理事会において 2005 年世界選手権準備委員会の設置が決まりました。これから本格的な準備が始まります。今一層のご協力ご支援をよろしくお願いします。